

フランツ・カフカ『審判』における女性／男性の人物造型

—もう一つの〈訴訟〉—

庄司 知記

I. はじめに

フランツ・カフカの長編小説『審判』¹⁾ (1914年8月～1915年1月執筆, 1925年発行)には, 女性について, あるいは女性蔑視と受けとれる言及が多く見られる。本論文は, こうした女性への言及が作品全体のテーマ²⁾との関係でいかなる意味をもつかを明らかにしようとするものである。そのためにまず, この作品から女性への言及のある箇所を, 最も重要であると考えられるフロイライン・ビュルストナー (Fräulein Bürstner) に関するものをできるだけ抽出する。次に, 上記の問いに対する答えとして, 女性であるフロイライン・ビュルストナーの人物像の変化は, 男性である主人公ヨーゼフ・K. (Josef K.) の人物像の変化と表裏一体をなしているだけでなく, 『審判』の法律世界に対する信頼性の揺らぎを表したものに他ならないという解釈を提案する。最後に, こうしたカフカの『審判』における「人物造型」³⁾の「審理 (Untersuchung)」から,

本論文は2016年11月12日(土), 岩手大学において開催された「東北ドイツ文学会・第59回研究発表会」で行った発表内容を基に, 大幅に改訂したものである。

1) 『審判』は, 本来『訴訟』という題名がより正確であるとされる。しかし, 日本においては『審判』という題名が定着しており, 本論文でも広く知られた『審判』を使用する。テキストとして, *Der Prozess*. Textbd. Hrsg. von Malcolm Pasley, Redaktion Hans-Gerd Koch. Frankfurt a. M. (Fischer) 1990 (P/KA) を用いた。以下, 同書からの引用は括弧内に頁数のみ示す。また, 中野孝次訳: 『審判』(決定版カフカ全集5) (新潮社) 1992年を適宜参照した。

2) 『審判』のテーマについては様々な議論があるが, 本論では最も多く論じられてきた問題の一つであるヨーゼフ・K.の有罪と無罪の問題を扱う。

3) 「人物造型 (characterization)」。劇や物語における登場人物のキャラクター (性格) 造型。作者が直接的に記述や論評の形でその人物の特徴を述べる場合と, 間接的に人物の行動・台詞や出で立ちからその性格を読者に推測させるやり方がある。(中略) 現代ではしかし, J・ジョイスの作品やフランスのヌヴォー・ロマンのように, 登場人物の性格の一貫性や統一性がその言動の表現によって曖昧にされ揺らぐような場合もある。[川口喬一, 岡本靖正編: 『最新文学批評用語辞典

フェミニズムやジェンダー研究から予想される批判, 「もう一つの〈訴訟〉」について判決を下す。

II. カフカの『審判』における「人物造型」の概要と背景

『審判』の主人公ヨーゼフ・K.は, 「何か悪いことをしたわけではなかった」(7)にもかかわらず, 逮捕され, 告訴されているという。しかし, これはヨーゼフ・K.の主観的な見方であり, そのように考えるK.の人間性については度々論じられてきた⁴⁾。それは女性に対する態度にも表れている。K.は処刑に至る過程で, 様々な女性たちに遭遇する。彼は大聖堂の聖職者に「おまえは他人の助けを求めすぎている。(中略)それも特に女性たちに。おまえはいったい気がつかないのか, そんなのが本当の意味での助けにはならないということに?」(289f.)と非難される。それに対し, 次のように返している。

女たちは大きな力を持っています。ぼくの知っている幾人かの女たちを動かして共同でぼくのために働かせ, 動かすことができたら, やりとげられるに違いないのです。とくにこの裁判所では, なにしるこの裁判所はほとんどただ女の尻を追い掛け回す連中から成り立っているんですからね。(290)

『審判』の読解にあたっては, 女性たちの助けが本当にK.の訴訟のためになるのか, 女性の助力の有効性を検討しなければならない。また, ヨーゼフ・K.は女性を惹き付ける存在であり⁵⁾, K.自身もそれを意識している。

おれ(ヨーゼフ・K.)はどうも女の助太刀人ばかり募っているようだが, とほとんど不思議がりながら考えた。初めはビュルストナー, それから裁判所の従僕の妻, そしてついにはこの小さな看護婦(看護師・レニ)だ。この娘はおれを求めてわけのわからぬ欲求を感じているらしい。(143, 括弧内引用者)

このためK.は女性の力で, 訴訟を有利に展開できると考えたのだろう。しかし, K.

(研究社) 1998年, 146~147頁]

4) 本論IV章を参照のこと。

5) これはK.が被告(Angeklagte)の一人であるからかもしれない。弁護士フルト(Huld)は, 「ほかならぬ被告こそが一番美しい人間」(251)であることについて「不思議でいわば自然科学的な現象(eine merkwürdige gewissermaßen naturwissenschaftliche Erscheinung)」と説明している。(250f.)

が見せる言動は女性蔑視とも捉えられうるものである。これまで、日本のカフカ研究においてはセクシュアリティはほとんど中心に論じられてこなかった。確かに『審判』には、ケイト・ミレット (Kate Millet) が『性の政治学』において分析した作品のような露骨な性描写・表現はない⁶⁾。だが、女性の読者を困惑させ、フェミニズムやジェンダー研究から批判的に受けとられるに十分な表現が含まれている。例えば、裁判所の従僕の妻についてである。従僕の妻は K. を助けたいと述べるが、K. は彼女が裁判所の役人に飽きたので、自分からだを提供しようとしており、墮落しきっていると考える (77)。予審判事 (Untersuchungsrichter) は従僕の妻に言い寄ろうとしており (81)、彼女は予審判事の手下ともいべき法律を学んでいる大学生ベルトルト (Bertold) の女でもある。K. は、女の誘惑に乗り、予審判事一味から彼女を奪うことほどよい復讐はないのではと自問自答する (83)。学生は女を片手で抱き上げると、判事のもとへ連れて行く (85)。「これがこの連中から被った最初の疑えない敗北」(86) であるとして、K. は嫉妬する (90)。このように女性を戦利品のように扱う表現をどのように考えたらよいのだろうか。また、フロイライン・ビュルストナーはヨーゼフ・K. から一方的にキスの嵐を浴びる。こうした点から、『審判』における女性像の果たす役割が問われ、『審判』は結局、男性によって描かれた産物にすぎないと批判されてきた⁷⁾。いかにして性差を超えた散文が書かれうるか問う必要がある。この問いに取り組むためには、まず『審判』における「女性」の人物造型を考察する必要がある。そして次に、それが主人公・ヨーゼフ・K. の「視点」から眺めた「女性」像であるとみなしてよいとした場合、『審判』の「男性」像も明らかにしなければならない。加えてそれらの「人物造型」が長編全体に及ぼす効果はどのようなものかを考察する必要がある。これまで、『審判』における女性の人物像と男性の人物像はそれぞれ別個の事象として論じられてきた。本論文ではさらに、これらの「人物造型」が『審判』の長編全体に及ぼす作用に着目する。

6) ミレットが考察したのは、主に D・H・ロレンス、ヘンリー・ミラー、ノーマン・メイラー、ジャン・ジュネの作品群である。[ケイト・ミレット (藤枝濤子、横山貞子、加地永都子、滝沢海南子訳) : 『性の政治学』(ドメス出版) 1985 年]

7) Vgl. Elizabeth Boa: Der Prozess; Imaginierte Weiblichkeit. In: *Kafka-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Hrsg. von Manfred Engel/Bernd Auerochs. Stuttgart/Weimar (J. B. Metzler) 2010, S. 478f. 他に Peter-André Alt: *Franz Kafka; Der ewige Sohn*. 2. Aufl. München (C. H. Beck) 2008, S. 402

III. 『審判』における「女性」像——グルーバッハ夫人とフロイライン・ビュルストナー

『審判』における女性像をめぐっては、テューブ (Typ) の対立が、ヨーゼフ・K.の有罪と無罪の問題の影に隠れるような形で登場している。伝統に従う保守的な女性 (グルーバッハ夫人) と、職業を持ち・価値観も自由な「新しい女性」⁸⁾ (フロイライン・ビュルストナー) の対立という構図である⁹⁾。そこから読み取れる事実と対立は現在でも議論となるものである。ヨーゼフ・K.が最も頼りにしたい、そして物語の鍵を握る女性、それは下宿の隣人フロイライン・ビュルストナーの方である。逮捕の日の夜に行われた、ヨーゼフ・K.とグルーバッハ夫人との会話から見てみよう。

彼はグルーバッハ夫人と話したくなかったので、すぐに彼女の部屋のドアをノックした。彼女はテーブルにまだ山ほどの古靴下を積み上げて、ニットの長靴下の繕いものをやっていた。(中略)「なぜこんなふうに遅くまで仕事をしているんです?」と彼はたずねた。(中略)「仕事がたくさんあるからですよ」と彼女は言った、「昼間は間借りの方々にかかりきりですし、わたしの仕事を片付けようとしたら、ただ晚しか残されておりませんかね。」(32)

夫人は昼、家業に従事し、夜は内職のような仕事で忙しい。グルーバッハ夫人にとって、K.は「一番大事な下宿人である」(32)。K.の方も、部屋の中の片付けの様子 (今朝の朝食類) から、「女性の手というものはそれにしてもこっそりと多くのことをやりとげるものだ」と感謝の念を抱く (32)。そして「ただ年をとった女性としかあのことは話せないんだ」(33)と考えて、グルーバッハ夫人と逮捕のことを話したかった。なぜなら「分別のある女性の判断 (das Urteil einer vernünftigen Frau) をおききしたかった」(34)からである。しかし、夫人の発言が K.を失望させ、彼女に頼ることを諦める。逮捕の際には、K.の部屋の隣人であるフロイライン・ビュルストナーの部屋が審理に使われていた。ビュルストナーは「タイピスト (Schreibmaschinistin)」で、「朝はとても早く仕事へ出かける習慣があり、夜は遅くに帰宅するので、K.とはまだ挨拶のこと

8) ビュルストナーは自立した「新しい女性」として語られる。(Vgl. Boa, a.a.O., S. 478)

9) グルーバッハ夫人 (Frau Grubach), フロイライン・ビュルストナー (Fräulein Bürstner), フロイライン・モンターク (Fräulein Montag) はそれぞれ夫人 (Frau), 嬢 (Fräulein) の呼称がついている。一方、K.が週に一度通う酒場の給仕女・エルザ (Elsa), カール (Karl) 叔父の娘・エルナ (Erna), 弁護士フルトの看護師レーニ (Leni) はただ名前だけで呼ばれ、裁判所の従僕の妻は „Frau“ だけである。

ばより多くのことを交わしたことがなかった」(19)。だから、逮捕の日まで彼女はただKの隣人であるにすぎなかったのである。ところが、彼女に話題が移ると、グルーバツハ夫人は下宿人である彼女を中傷し始める。ビュルストナーは劇場に行くときはいつも帰りが遅いという(35)。そして、グルーバツハ夫人はもっともっとビュルストナーを観察するつもりだと述べる。

「なにも決してビュルストナーさんを悪く言うつもりはありませんよ、彼女はかわいらしい、いい娘さんですからね、愛想もよく、きちんとしていて、時間も正確だし、よく働きます、そういったことすべてをわたしはとつても高く買っているんですよ、しかしもっとプライドを持って、控えめにしたほうがいいことはたしかですね。今月になってわたしはもうすでに二回も、ずっと離れた通りで、そのつど彼女が違う男性の方といっしょなのをお見かけしましたよ。」(中略)「あなたはまったく思い違いしてますよ」、とKは怒り狂って、ほとんどそれを抑えることもできずに言った。(中略)「ほくはむしろ率直にあなたに警告しておきます、あのお嬢さんにそんなことを言っちゃいけませんよ、あなたはまるっきり間違っているんです。」(36f.)

夫人はビュルストナーの容姿や気立てのよさ、仕事ぶりの有能さを称えた一方で、ビュルストナーの男性との付き合いに苦言を呈する。中傷によって逮捕されたと考えているKは、グルーバツハ夫人のビュルストナーに対する中傷に我慢がならず、激怒する。夫人はKを信じて、ただ知っていることを打ち明けただけだと付け足している。夫人は主としての義務から下宿を守ろうとするあくまで保守的な考えの持主である。下宿人である若い女性の異性関係について非難し、推測から下宿人を不潔だと言う態度に、Kの怒りは爆発する。そして、清潔でない自分をこの下宿から追い出せと言い残し部屋を後にする¹⁰⁾(ヨーゼフ・Kは酒場の給仕女・エルザのもとに通っている)。ここでのKは、隣人へ配慮する姿勢を見せており、逮捕・告訴されたというKよりもグルーバツハ夫人の邪見さが際立って見える。この小説が書かれた後のワイマール期には、「ホワイトカラー」の女性が活躍し始め、社会も戦後の新しい変化として認知し

10) 「もしあなたがそんなに下宿を清潔に保っておきたいんだったら、いちばん初めにまず僕(ヨーゼフ・K)を立ち退かせることですよ」(37, 括弧内引用者)。後にグルーバツハ夫人は、間借り人を中傷する気はなかったと涙ながらに弁明している(317)。グルーバツハ夫人はKにおそらく好意を寄せており、下宿から出て行ってほしくない。しかし、夫人はまた余計なことを言ってKを怒らせる(319)。一方でKも内心では下宿の隣人モンタークを誹謗する(320)。

た時代であった。彼女たちは「キャリアウーマン」として、「新しい女性」を体現していたのである。しかし、一方でグルーバツハ夫人のように、彼女たちを快く思わない者もいた¹¹⁾。しかも、フロイライン・ビュルストナーの「タイピスト」という職業は、大衆から特に好奇の目で見られ、当時のメディアに登場した存在であったという¹²⁾。そして主婦たちこそ、そのような「キャリアウーマン」に最も反感を覚えた人々だったのである¹³⁾。グルーバツハ夫人は、厳密には主婦とはいえないかもしれない。だが、彼女のビュルストナーに対する態度は、この時代の主婦の、働く女性に対する否定的な態度を表しているといえないだろうか¹⁴⁾。さて、グルーバツハ夫人との対話を一方的に切り上げたヨーゼフ・K.であるが、ビュルストナーがいつ帰ってくるのか確かめ、言葉をお互い試そうと待ち構える(37ff)。本当にビュルストナーが夫人の中傷どおりの女性なのかを試そうとしたと捉えることもできるだろう。K.はビュルストナーが「どんな外見だったかについてすら正確に思い出さずさえない」(38)くらい彼女と疎遠であった。しかし、彼女は帰ってくると機嫌よく挨拶をし、遅い時間であったため「今でなくちゃいけませんか？少し変じゃありませんか？」(39)と尋ね返すが、すんなりとK.を自室に招く。

11) ウーテ・フレーフェルト (Ute Frevert) [=ドイツの女性歴史家]は次のように記している。「女性解放の典型として熱い視線を浴びたのは、若い女性ホワイトカラーであった。彼女たちは一方では新しい時代の子としてもはやされたが、また反対に罵倒もされた。秘書、速記係、店員は、ワイマール体制の新しさを際立たせる存在のように思われた。」[ウーテ・フレーフェルト (若尾祐司, 原田一美, 姫岡とし子, 山本秀行, 坪郷實訳):『ドイツ女性の社会史——二百年の歩み』(京都:晃洋書房)1990年, 163頁]

12) 「映画だけではなく、雑誌や新聞も新しいタイプのホワイトカラーを取りあげた。『タイピスト』は、ラインダンスの『ガール』とならんで戯画やゴシップにさかんに登場した。」(同上, 168頁)

13) 「最大会員数を誇る主婦団体は(ワイマール時代には)家庭こそあらゆる女性の本来の任務と強調し、主婦という職業を女性の生きる唯一の道で、しかも民族の繁栄のための貴重な貢献とみなして賞賛し、『キャリアウーマン』に不信の念を抱いていた。」(同上, 184頁~185頁, 括弧内引用者)

14) 『審判』は1914年の8月から、いまだオーストリア=ハンガリー帝国の下にあったプラハで書かれている。つまり、これは第一次世界大戦後のワイマール共和国時代、1920年代よりも10年ほど早い。1914年ごろに関するフレーフェルトの言及は、第一次世界大戦下の女性や戦争がいかに女性を解放したか、また本当に戦争が女性を解放したのかという分析で占められている。カフカは非常に早く「新しい女性」の出現と、彼女たちに対する世間の目を、敏感に察知していたといえよう。

それじゃ二、三分わたしの部屋に入ってください。ここじゃまさかお話すわけにはいきませんからね、だってほかの人を起こしてしまいますし、人のことよりなによりわたしたちのために不愉快なことになるでしょうからね。(中略) K.は言われたとおりにし、それからしかしフロイライン・ビュルストナーが彼女の部屋からもう一度入るようながすまで静かに待っていた。(39f.)

K.は彼女が二度うながすことを待っているのであり、決して独身の女性の部屋へ強引に押しかけたのではない¹⁵⁾。ビュルストナーは K.が自ら認めた「清潔ではない男」を、無警戒に部屋に招き入れるという過失を犯してしまっている。ここで、グルーバツハ夫人が告発した「いつも違う男性と一緒にいる」というビュルストナーの一面が明らかになってしまうのである。なるほどビュルストナーは夫人の言うとおり「もっとプライドを持って、控えめにしたほうがいい」かもしれない。夫人の思い違いではなく、K.の方が間違っていたのである。それから、K.は自分の「審理」が彼女の部屋で行われたので、彼女の部屋が荒らされたことを詫げる。二人は顔見知りとはいえ、互いによく打ち解けた仲ではないため、「このときはじめて二人はたがいに目と目を合わせた」(40)。それから、訴訟について話す。その際、ビュルストナーはK.の予想以上に裁判について強い関心を示す。

というのはわたし、なんでも知っておきたいたちなんです。それにほかならぬまさに今、裁判沙汰には並々ならない興味があるんです。裁判ってなにか奇妙な魅力がありません？でも、いずれこの方面 (in dieser Richtung) でもわたしの知識はきっとより完全なものになるわ、だって来月にはわたし事務員としてある弁護士の事務所に行くことになってるんです。(42)

K.は弁護士事務所で働くという彼女が、自分の訴訟の「助言者 (Ratgeber)」(43) になってくれることを期待する。しかしそれよりも、彼女の様子に心を奪われてしまう。

しかしいま彼が考えているのはそれについて (逮捕のこと) ではなくて、彼は完

15) 「『おかけください』と彼女は言って、ソファーを指さし、彼女自身は、疲れていると言ったにもかかわらず、ベッドの柱に凭れてつっ立ったまま、小さな、しかしあふれんばかりに満たされた花々で飾られた帽子を脱ごうとさえしなかった。『というわけで、どういうご用ですか？ぜひ知りたいものですわね』 そう言っただけで足を組みあわせた。」(40)

全にフロイライン・ビュルストナーの様子に心を奪われていた。彼女は片方の手で顔を支えて——肱はソファー (Ottomane) のクッションの上にあてがって——もう片方の手でゆっくりと腰をなでまわしているのだ。(43, 括弧内引用者)

この場面は、夜遅く仕事から疲れて帰ってきたビュルストナーがソファーに座っただけと見過ごされてきた。しかし、これについてイギリスの研究者、エリザベス・ポーアは、フロイライン・ビュルストナーが「新しい女性」から „Odaliske“ (トルコの後宮の白人女奴隷。この „Ottomane“ は背のないソファーを指す女性名詞だが、男性名詞の場合はトルコ人を指す¹⁶⁾) に突然変異 (mutieren) したと主張した¹⁷⁾。それに対しオーストリアの研究者、スザンネ・ホッホライターはこの場面には触れず、フロイライン・ビュルストナーがそのような「誘惑者 (verführbare oder verführende Frau)」ではなく、むしろ「卓越した (in ihrer Überlegenheit)」 「女性のテューブ (Frauentyp)」を代表していると、全く異なる評価を下している¹⁸⁾。なぜこのように意見が分かれるのか。その理由の一つとして、『審判』における「視点」の問題が挙げられる。『審判』を特徴付けるものの一つが、その叙述方法であるが、フリードリッヒ・バイスナー (Friedrich Beissner) は『物語作者——フランツ・カフカ』¹⁹⁾においてカフカの叙述方法を文献学の立場から分析した。バイスナーの考えをまとめると、『審判』は三人称小説だが (だから「語り手」は厳密にはヨーゼフ・K.のものではないはずである) 常にヨーゼフ・K.の「視点」から書かれているということである。例えば、「彼 (ヨーゼフ・K.) は知っていた、ビュルストナーがただのタイピストの女性であって、彼に長くは抵抗できないはずだということを (324, 括弧内引用者)」と語られる。だが本来これは三人称であるはずだが、ヨーゼフ・K.の考えが述べられているのである。粉川哲夫は、バイ

16) Vgl. Duden: *Fremdwörterbuch*. Mannheim (Dudenverlag) 1982, S. 535, S. 551

17) Boa, a.a.O., S. 478f.

18) ホッホライターによれば、ビュルストナーは性的でなく、むしろそれが取り除かれた存在である。彼女は一人の「未婚の女性」であり、独身で、自立している。また、経済的にも情緒的にも男性に依存していない。そして、「誘惑者」であると評価されているのとは全く逆だとする。ビュルストナーは卓越した女性であり、その役割は同時代の女性が得ようと努めていた一つの規準を代表したものであるという。その理由として彼女とモンタークだけがフロイラインと呼ばれ、さらに未完の章「B.の女ともだち (B.'s Freundin)」のB.はK.のような名前であり、無視することのできない記念すべき表題であることなどを挙げている。[Vgl. Susanne Hochreiter: *Franz Kafka; Raum und Geschlecht*. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2007, S. 152f.]

19) フリードリッヒ・バイスナー (粉川哲夫訳編): 『物語作者 フランツ・カフカ』 (せりか書房) 1976年 (発表は1952年)

スナーの分析から『審判』の主人公ヨーゼフ・Kの「視点」の問題をさらに考察した。粉川は、『審判』にはヨーゼフ・Kの考えしか語られておらず、そのため「何の罪も犯したわけでもないのに逮捕された」というのはKの思い込みだという主張を展開した²⁰⁾。この場面に彼らの考えを適用すると、Kが見たビュルストナーの様子、まるでKを誘惑するとも受けとれうる光景は、「Kの視点から見たものにすぎないのではないか」という疑念が生じる。『審判』の叙述方法が読者の見解を異にさせているのである。このあと、Kは訴訟の問題がどうなっているか自分で説明することができない。だからビュルストナーは「だいたいあなたを部屋に入れるべきではなかったんです。だってそんな必要もなかったんだから、いまうかがったところではね」(44)と述べる。そのため、Kは朝の逮捕の様子をビュルストナーの前で再現しようとする。それはビュルストナーにとって本来は好ましくないことであり、「あんまり疲れているものだから、やっちゃいけないことまで許してしまうんだわ」(44)と発言する。監督官(Aufseher)の役割に熱中しすぎたKは、笑って聴いているビュルストナーが人差し指を口にあてて叫ぶのをやめさせようとしたが、「ヨーゼフ・K！」と叫んでしまう(45)。「すると隣室のドアを二・三度、強く、短く、規則正しくノックする音がした。ビュルストナーは青ざめて、胸に手をあてた」(45)。Kはわれに返り、ビュルストナーのもとに飛んで行き、彼女の手をとる。昨日から隣(居間)にグルーバツハの甥であるランツ大尉(Hauptmann Lanz)が寝ていたのだ。

「あんなに大声で叫ばなくてもよかったのに！ああ困ったことになったわ。」「困る理由なんか何もありません」とKは言って、彼女がクッションに倒れ込んだそのとき、その額にキスをした。「出てって、出てって」と彼女は言って、急いでまたからだを起こした、「出てってください、帰ってください、何をしようっていうの、彼がドアに聞き耳をたててるじゃありませんの、彼がみんな聞いているのよ。もうこれ以上困らせないで！」「ぼくは出て行きませんよ」とKは言った、「あなたがちょっと落ち着きを取り戻すまではね。」(45f.)

ポーアが指摘したように、ビュルストナーが「誘惑者」へと変貌したとするならば、大尉のノックは、単に隣室での深夜の物音に対する抗議ではなくなる。「ヨーゼフ・K」と叫ぶことは、ただ深夜の騒音となるだけではなく、Kがビュルストナーの部屋にい

20) 粉川哲夫：「実存主義的カフカ・アプローチを越えて」——[フリードリッヒ・バイスナー、前掲書、109～133頁所収] 119～120頁参照。

ることを隣人に伝えることになるからである。事実、フロイライン・ビュルストナーは男性が彼女の部屋にいることを知られてしまうことに狼狽している。一方、開き直ったKはこの後、彼女にキスの嵐を浴びせるが、もし叫ばなければ、彼はフロイライン・ビュルストナーとキス以上の関係になることができたかもしれない。せつかくの機会を逃した間抜けと読むこともでき、滑稽な印象を与えている。そして、続くKの発言はビュルストナーを驚かせる。

「ぼくがあなたに襲い掛かったんだという噂をひろめさせたいんだったら、そのとおりの主旨でグルーバツハ夫人に伝えましょう、そしてぼくに対する信用を少しも失わずに、そのとおりに信じさせましょう、それくらい彼女はぼくを大いに頼りにしているんです。」(46)

大銀行の業務主任(Prokurist)であるヨーゼフ・K.はグルーバツハ夫人から尊敬されている。彼女はK.からかなりのお金を借りてもいるらしい。さらに夫人はヨーゼフ・K.を単なる間借り人以上として見ていて、おそらくK.に気ががあると推察される。K.もそれを十分に承知しており、夫人の信頼を自らのビュルストナーへの行為に対する正当化のために使おうとしているのである。仮にこのことをグルーバツハ夫人に報告したら何が起るだろう。ヨーゼフ・K.を信用しているのに対し、ビュルストナーを信用していない夫人である。たとえどのように弁護しようとも、フロイライン・ビュルストナーがK.を誘ったのだ、ビュルストナーがいけなかったのだと決め付けるだろう。

「ごめんなさい、あの突然のノックの音にあんまりびっくりさせられてしまったものだから。でも大尉がその場にいることで起るかもしれない結果がこわかったわけじゃない。あなたが叫んだ後とっても静かになった、するとそこにノックの音がした、それであんなにびくっとしてしまっただけです。(中略)あなたの提案はありがたいけど、わたしとしては受け取れません。(中略)それよりわたし驚いているんです、あなたが気づいていらっやらないことにね。あなたの提案のなかにわたしに対するどんなひどい侮辱が含まれているかっていう。」(47)

ビュルストナーは発言においては、確かに「誘惑者」ではなく「貞淑者」であるといえる。K.はビュルストナーに「私に腹を立てたんじゃないでしょうね？」と尋ね、自らの行為の反応を彼女に確かめた。それに対し、彼女は「いや、いいえ。わたし一度も、だれに対しても、腹を立てたことなんかありません」(47)と寛大な態度を見せ

た。しかし、K.は彼女の好意をよいことに、確信犯的に二度目の、最初のものよりも過剰なキスをする。

彼女は下から小さな明かりが洩れている大尉の部屋のドアを指さした——「明かりをつけて、わたしたちの話を聞いているんです。」「すぐいきます」とK.は言って、駆け寄り、彼女をとらえ、彼女の口にキスをした、それから喉の渇いた獣が、ようやく見つけた泉の水に向かって舌をつけるように顔中いたるところにキスをした。最後に彼は彼女の首すじ、喉のあたりにキスをして、そこに彼は長いこと唇を押しつけていた。ある物音が、大尉の部屋からしたとき彼は顔を上げた。(48)

これは見方によっては、立派な犯罪ともいえるほどのものである。エリアス・カネッティはこの場面について、カフカのフェリーツェ・バウアーとの婚約解消の出来事が反映しているという説を提唱した²¹⁾。フロイライン・ビュルストナーの略記号はF. B.となり、フェリーツェ・バウアーがモデルであることは度々指摘されてきた²²⁾。しかし、カネッティはこのキスの場面においては、グレーテ・ブロッホ (Grete Bloch) がビュルストナーの代わりを果たしているという推察をした。ブロッホはフェリーツェの友人であり、カフカとフェリーツェの間に立ちながら、カフカが密かに文通していた女性である。そして、カネッティはこの行為によってK.は有罪になったと主張している²³⁾。だが、ビュルストナーは裁判沙汰に非常に興味があるとK.に言って聞かせたにもかかわらず、K.が彼女に行った行為を裁判に訴えることはしない。なるほど、仮に訴えたとしても、彼女にとって不利な証拠が多いともいえる。これら一連の行為が原因となり、この夜以降K.は手紙を書くなどいろいろな方法を取るが、ビュルストナ

21) Vgl. Elias Canetti: *Der andere Prozess; Kafkas Briefe an Felice*. München (C. Hanser) 1969, 71f.

22) 例えば、『審判』(決定版カフカ全集5)、212頁、訳者注を参照のこと。

23) 「K.は午前にはまだなんの罪も意識していなかったが、その晩の振る舞いによって、ビュルストナー嬢に対する彼の不意の襲撃によって有罪となった。なぜならば『彼はそれに満足した』からである。」(Canetti, a.a.O., 71f. 括弧内引用者)しかし、グルーバツハ夫人 (Frau Grubach) の名前の略 (G. B.) に注目すれば、彼女こそがグレーテ・ブロッホ (Grete Bloch) の代理なのではないか。現実のブロッホは未婚のキャリアウーマンであり、その点は全く異なっているが。そして、カール叔父の娘・エルナ (Erna) は、カフカに親切で信頼してくれた [Franz Kafka: *Tagebücher*. Textbd. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. (Fischer) 1990, S. 663. 以下 *Tagebücher* と略記。1914年7月28日] というフェリーツェの妹エルナをそのまま表しているのではないか。

一と接触できなくなる。代わりにビュルストナーの依頼を受けたというフロイライン・モンターク²⁴⁾が「部外者」として現われる。話のあいだモンタークの目は絶え間なく K.の唇にそそがれ、K.はうんざりする (322)。彼は、モンタークがランツ大尉と話し込むのを好機ととらえて²⁵⁾、ビュルストナーの部屋を覗くことに成功する。そこで目の当たりにしたのは、「壁に接していまやベッドが二つ並んでいた」(325)ことである。ホッホライターは、このことからビュルストナーがモンタークと恋仲であると指摘し、これが K.を拒絶した理由だという説を提唱した²⁶⁾。なるほど、確かに二人の仲は深い可能性がある。他方、フロイライン・ビュルストナーという名前が卑猥な裏の意味を含んでいるという指摘もなされ、彼女の男性に対する貞淑さに疑念も残る²⁷⁾。彼女は発言では一貫して貞淑さを見せているが、その存在は「誘惑者」か、それとも「卓越者」なのか。どちらであるにしても、それは男性の手で描かれた、「想像された女性たち」と批判されてきたものである。このような描かれ方をしている理由について、次章では、ヨーゼフ・K.を中心に男性像を考察することで、『審判』で描かれた「人物造型」の分析を深めていく。

24) 「フランス語の女教師—— ついでながらドイツ人でモンタークという、虚弱そうな、蒼白い、少し跛行して歩く若い女—— がこれまで個室に住んでいたのにビュルストナーの部屋に引っ越した」(316)。ビュルストナー自身がやってくるつもりだったが、彼女は今日、少し体調が悪いらしい (322)。ただし、このモンタークが現われる章は、未完の章「B.の女ともだち (B.'s Freundin)」(315-326) として遺されたものである。言うまでもなく、モンターク (Montag) とは「月曜日」であり、働く女性を示唆している。

25) ランツ大尉は深夜の物音について何も洩らさなかったようだ。(318)

26) Hochreiter, a.a.O., S. 152

27) フロイライン・ビュルストナー (Fräulein Bürstner) は „bürsten“ の変化形であり、性的な意味がほのめかされているという。[Vgl. Ritchie Robertson (Aus dem Englischen von Josef Billen): *Franz Kafka; Leben und Schreiben*. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 2009, S. 52] 19世紀には、「市民層」の男性が買春婦や下層の女性と「束縛のない自由な交際」ができた(ヨーゼフ・K.のように)のに対し、「市民層」の未婚の女性たちが男性と交際するにあたっては、タブーが存在した。彼女たちは結婚するまで「純潔」を守らなければならなかったのである。一方で、当時の実態について、女性のセクシュアリティの意識には個人差があり、「公的に明示された性道徳が実際にどの程度守られていたのかについては知ることができない」とされている。(フレーフェルト、前掲書、122頁参照) つまりフロイラインならばビュルストナーであってはならず、ビュルストナーならフロイラインのはずがないので、これはある種の皮肉・フモアの意味がこめられた名前になる。独語の „bürsten“ には「性交する」という意味もある。[Vgl. Duden: *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*. Mannheim (Dudenverlag) 1993. „bürsten“ の項参照]

IV. 『審判』における「男性」像——ヨーゼフ・K.と裁判所の関係者たち

『審判』で描かれた女性像を弁護するならば、『審判』における男性、ヨーゼフ・K.や裁判所組織に属する者たちもまた、批判的に描かれている。カフカは『日記』（1914年5月27日）に次のように記している。

ぼくは（K）²⁸⁾を醜悪だと思う。それはぼくにほとんど吐き気を催させる。けれどもぼくはそれを書く。それはぼくにとても非常に特徴的（charakteristisch）であるに違いないからだ。（*Tagebücher*, 517）

この記述どおりならば、ヨーゼフ・K.は肯定的には描かれておらず、むしろ否定的に描かれた存在である。『審判』には男女を問わず、様々な人物が登場する。しかし、主人公はヨーゼフ・K.であり、『審判』がヨーゼフ・K.の物語であることに疑問の余地はない。K.は物語の中で、発言では首尾一貫して「無罪」を主張しているが、『審判』においては主人公ヨーゼフ・K.の「視点」の問題が存在する。そのため、『審判』にはヨーゼフ・K.の考えしか語られておらず、「何の罪も犯したわけでもないのに逮捕された」というのはヨーゼフ・K.の思い込みにすぎないという議論がある。つまり、ヨーゼフ・K.は自己批判が欠けている、自分の「罪」に気づかない道化的で滑稽な人物ということである²⁹⁾。K.は、上司である頭取にはへりくだった態度をとり、頭取代理（*Direktor-Stellvertreter*）と銀行内で競争している。いわば現代的な人物でもある。彼は審理の席で「たしかあなたは塗装職人だったね？」と問われる。それに対し、「大銀行の業務主任（*erster Prokurist einer großen Bank*）」であるとわざわざ「大」をつけて訂正する（61）。また、同じ銀行の行員である、ラーベンシュタイナー（*Rabensteiner*）、クリッヒ（*Kulich*）とカミナー（*Kaminer*）を同僚とは認めず、「下っ端（*untergeordnete Beamte aus der Bank*）」だと訂正し（27）、見下す。これらの事実から、ヨーゼフ・K.は権威的な人物でもあり、秩序に身をゆだねた職業人の最適な例、組織人間としても説明されてきた³⁰⁾。この組織人間としてのヨーゼフ・K.に付け加えると、K.もまた裁判所の階層構造の一員であるかもしれない。K.は司法関係者・役人たち（*Gerichtsbeamte*）を軽蔑し、告発しようともしている。しかし、K.は工場主から「あなたはなにしろほ

28) このKはトランプのカードから連想されており、ヨーゼフ・K.を指していると考えられている。[谷口茂訳：『日記』（決定版カフカ全集7）（新潮社）1992年、270頁、訳者注参照]

29) 粉川哲夫：『カフカと情報化社会』（東京未来社）1990年、218頁。

30) Robertson, a.a.O., S. 104

とんど弁護士ですからね。わたしはいつも言っているんですよ、業務主任の K.さんはほとんど弁護士のような方だって」(182)と言われる。K.は弁護士など司法関係者・裁判所組織の役人たちと「同じ穴の貉」、つまり同種の人間の一人であることも示唆されているのである。実際、K.は検事ハステラー(Hasterer)のもとに集う仲間(Gesellschaft)、他には „Richter, Staatsanwälte, Advokaten, junge Beamte, Advokaturgehilfen“ がいるエリート層の一員なのである³¹⁾。『審判』の世界は、「なにしろすべてのものが裁判所の一部なのだから」(202)、「こんなにたくさんの人が裁判所と関係しているとは！」(180)と語られる。また、K.は自覚しているようには描かれていないが、K.の勤める「大銀行」の行員も裁判所組織と同じ „Beamte“³²⁾である。

また、「銀行の上級幹部のひとり (einer der obersten Beamten der Bank) (355)」であるヨーゼフ・K.を逮捕しに来た一人は、巨大な裁判所組織の下っ端の監視人 (Wächter) フランツ (Franz) であった。フランツとヨーゼフ・K.は逮捕の際、「身分証明書」をめぐるやりとりをする。二人の名前を合わせると、フランツ・K.となり、二人は「フランツ・カフカ」を連想させ、フランツとK.は互いの分身ともいえるものである。この二人の分身の持つ意味を反映したのが、K.の賄賂をめぐる態度である。一度、K.は訴訟を有利に進めるため、賄賂について考える。しかし、「賄賂や横領は喜んで断念したい」(88f.)と判断するのであり、ここでのK.は充分な順法意識を持った人物といえるだろう。他方、K.のせいで鞭打たれることになったヴィレム (Willem) とフランツを救うため、賄賂をやるうとする。

K.は金を惜しみたいのではなかった。本当に彼にとって監視人たちを自由にしてやるのが関心事だった。彼は今やすでにこの裁判組織の腐敗と戦うことを始めてしまったのだから、このようなことにも手を染めるのは当たり前なのだ。(115)

K.は二人を助けられなかったことに多少の罪悪感を持つのであり、K.は正義感を持つ一面も見せている。K.は最初から最後まで「無罪」を主張しながら、行動や意識は有罪と無罪を行き来しているのである。また、先述したとおり、ヨーゼフ・K.はフロイライン・ビュルストナーに対しては積極性を見せた。一方、弁護士フルトの看護婦

31) 未完の章「検事 (Staatsanwalt) (327-335) の中でそれが描かれている。

32) カフカは当時、公共の組織である「在プラハ・ボヘミア王国労働者災害保険協会 (Arbeiter-Unfall-Versicherungs-Anstalt für das Königreich Böhmen in Prag)」に勤めていた。そのことが、影響を与えていると推測できる。(Vgl. Robertson, a.a.O., S. 7)

(看護師)レーニに対しては自分から誘いかけることはなかった。Kは「待っていた」という彼女に、自分のことを内気な人間であると弁解している³³⁾。Kは性格においても厚かましさと内気さの間を揺れ動いている。さらに、ヨーゼフ・Kには検事ハステラーとの仲が疑われる³⁴⁾。このことによってモンタークとの仲が疑われるフロイライン・ビュルストナーと対応関係にあるといえる。

V. 『審判』の「人物造型」と法律世界

III章とIV章の分析で得られたことは、『審判』の登場人物の「人物造型」が女性も男性も、一貫しておらず、定義することが困難であるということだ。ある人物が、あるときに突然「変身」する、それが『審判』における「人物造型」の特徴の一つだといえる。カフカ研究における「人物造型」についての最も重要な議論の一つは、カフカの友人であったマックス・ブロート (Max Brod) によるものである。ブロートはカフカの伝記の中で、カフカの描く事物は真実以外の何物でもないと強調した。ブロートに言わせれば、カフカの散文は「見方が異様なのではなく、ただ非常に綿密で、鋭敏で、正確なのだ」³⁵⁾という。そして、カフカも傾倒していたというフランスの作家、オノレ・ド・バルザック (Honoré de Balzac, 1799~1850) の描写と対比している。

こんなカフカ (綿密で、鋭敏で、正確な描写の) と正反対の立場にある代表者はバルザックである。バルザックの場合、一見正確な描写もでっち上げたものであり、バルザックの最高級をやたらに使った表現、何事も普遍化してしまうやり方はカフカの場合とは正反対である。例えばこんな表現である。「彼女は、パリの婦

33) レーニは男性に言い寄る完全に娼婦チューブの女性である。彼女は「あなたのほうから出て来てくれるだろうと思ってた」と言い、「私を待たせておくんて」とKに抗議する。それに対し、Kは「ぼくは厚かましい (frech) 人間じゃなくてむしろ内気 (schüchtern)」だと弁解している。(140f.)

34) 例えば、Kをマントの中に隠してもぜんぜん目立たないほどの巨大な検事と腕を組み歩いて夜に家へ帰る (329)。検事は、ヘレーネ (Helene) という、肥ったやや年のいった女を自宅に囲っていたが、飽きてきて追い払う。その晩、二人はとくに長いこと一緒に過し、ハステラーの提案で友情 (Bruderschaft) を祝す (333)。二人の親しい関係は銀行の上司である頭取 (Direktor) に疑われる。頭取は検事と腕を組んで歩いていなかったか、とKに尋ねる。Kが昨晩は検事と本当に教会のそばを通ったと説明すると、頭取は驚き (334)、「そんな友人関係だとはぜんぜん知らなかった」と言う (335)。ただし、これも未完の章「検事 (Staatsanwalt)」(327-335) の中である。

35) マックス・ブロート (辻理、林部圭一、坂本明美訳)：『フランツ・カフカ』(みすず書房) 1972年、59~60頁参照。

人の誰もが午前十時と十時十五分の間に見せるあの軽やかな足どりで歩いて行った。」³⁶⁾

この描写をカフカと比べてみよう。カフカの人物が態度や意識のうえでは首尾一貫せず(口では無罪を主張したり、貞淑さをみせたりと一貫している)、突然に変貌を遂げるのに対し、プロートの言葉を借りれば、バルザックの描く人物は普遍的ともいえる一貫した行動を取る。パリの女性はみんな同様の足どりで歩いていく、これがバルザックの「人物造型」である。これは、明らかにカフカとは違った方法であるように見える³⁷⁾。だが、20世紀以降の小説において、登場人物の性格の一貫性や統一性は揺らぐことがあるとされてあり³⁸⁾、それだけでカフカに固有の特徴とはいえない。しかし、『審判』においては「人物造型」の問題が、ヨーゼフ・K.の有罪と無罪の問題、ビュルストナーが誘惑者であるか卓越者であるかの問題、そして作品全体の世界の問題、すなわち「掟」と大いに関わってくる。それは、『審判』において、本来であれば信頼できるはずの法も驚くべき変貌を遂げているからだ。裁判所はときに「あなたは好きなようにするがよい、けれども上級裁判所は嘲弄されたままだまっではいけないことを銘記しておくのだな」(336)と暴力的な言動をする存在となる(もっともこれはK.が裁判所を侮辱したからともいえる)。また、K.が閲覧する予審判事の本・法律書もポルノや性差別、家庭内暴力の本としての姿(K.の視点から)を見せる。

36) 同上、60頁、括弧内引用者。

37) しかし、バルザックの「人物造型」にはより注意深い考察が必要である。ヴァルター・ベンヤミンは、プロートによるカフカとバルザックの比較について、「カフカの考えとは縁もゆかりもない」と批判している。ベンヤミンに言わせれば、バルザックの「でっち上げの正確さ」、わかりやすい駄ばらはバルザックの作品および、その偉大さと全く切り離せないものである。[ゲルハルト・ショーレムあて手紙、1938年6月12日パリより。Vgl. Walter Benjamin: *Briefe* 2. Hrsg. und mit Anmerkungen versehen von Gershom Scholem und Theodor W. Adorno. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1978, S. 759] そのベンヤミンも、カフカの描写のあり方を、バルザックより進んだものとして別の機会には評価している(テオドル・W・アドルノあて手紙、1939年2月23日パリより)。「典型(Typ)のコミカルな側面と、ぞっとする側面をも押しだすこと」を小説で初めて共に満たしたのはカフカだという。そして「バルザック的な諸典型」はカフカにおいて、〈助手〉や〈官吏〉や〈村人〉や〈弁護士〉となり、K.が「唯一の人間として、平均的ないさあいにおいて非典型的な存在として対置される」とした。(Ebd., S. 807)しかし、ここで語られるK.は『城』の測量士である。『城』の人物造型については、次の機会に論じたい。

38) 本論I章、脚注3を参照のこと。

K.が一番上の本を開くと、一枚のいかかわしい絵があらわれた。男と女が裸でソファに腰をおろしている絵で、絵描きのいやらしい意図ははっきりと見てとれたが、しかし絵はあまりに拙劣なので、結局は要するに一人の男と一人の女が——極度に身体ばかり画面からこちらへとび出し、過度にまっすぐそこに坐っていて、誤った遠近法 (*falsche Perspektive*) のためにただどうにか互いに並んで向きあっている男と女が、見てとれるというだけのものであった。K.はそれ以上本をばらばらとめくるのをやめて、二冊目の本は扉だけ開けてみた、それは『グレーテが彼女の夫ハンスより受けし苦しみ』という題名の長編小説だった。/「これがここで学ばれている法典というわけだ」とK.は言った、「そんな人間どもによってほくは裁かれる定めってわけだ。」(76f.)

『審判』の法は、最初から最後まで首尾一貫してK.が有罪であると主張しているが、それは突然、信頼できない「法」に変身してみせるのだ。しかし、法律が男性によってコントロールされていると考える立場からすればこれは至極もつともなことである。アメリカ合衆国のラディカル・フェミニスト、キャサリン・A・マッキノン³⁹⁾は、法律が長い間、「男性のもの」であったとし、法律による手段を「世俗的宗教 (*the secular religion*)」と表現している³⁹⁾。まさに『審判』が見せる世界の「掟」⁴⁰⁾は現実の法の「誤った遠近法」を表しているといえよう。

39) 「法律はこれまで長く、狩猟、戦争、宗教と同じように、男性世界のものであった。これらの仕事の価値や質が男性役割 (ママ) と公的生活を定義し、権力とは何かを定義してきたのである。/フェミニストは、女性の権利拡大について展望するとき、こんなふうを考える。もし私たちが、長く男性世界のものであった経済 (狩猟の現代版)、物理的力の行使 (その形態は戦争)、法律的手段 (世俗的宗教) といった権利形態を手にするとしたら、男性と異なる使い方をするだろうか。私たちは女性として、女性のために、これらの権利を行使するだろうか。最終的な問題は、生物学的な意味での女性と男性のどちらかが権力を握るかということではない。問題は、私たちの帰属意識とは何か、私たちの忠誠心とは何か、私たちはだれに対して責任をとるのか、ということである。」[Catharine A. MacKinnon: *Feminism Unmodified; Discourses on Life and Law*, Cambridge; Massachusetts/London; England (Harvard University Press) 1987, p. 26 邦訳は、キャサリン・A・マッキノン (奥田暁子, 加藤春恵子, 鈴木みどり, 山崎美佳子訳): 『フェミニズムと表現の自由』(明石書店) 1993年, 42~43頁による。下線引用者。]

40) 『審判』において „Gesetz“ を「掟」と訳すか、「法」と訳すかは意見の分かれるところである。筆者はマッキノンが「法がすべてではない (Not by Law Alone)」(Ibid., pp. 21-31, 同上, 33~52頁所収) と論じ、「世俗的宗教」と述べたように、不完全さと宗教性を暗に示す「掟」がよりふさわしいと考える。

VI. まとめ

以上、『審判』の「人物造型」を考察してきた。最後に『審判』の「人物造型」の分析から得られた結論を述べる。

ヨーゼフ・K.は結局、フロイライン・ビュルストナーの「助け」を得ることができずに終わる⁴¹⁾。K.は夕方の疲労困憊のうちに頭の中での観察を行う。そこでビュルストナーは、グルーバツハ夫人の間借り人たちが足並みを揃えたグループ（彼らはまるで告訴の聖歌隊のように、口を開け頭と頭を寄せ集め合っている）のなかで、両側に立つ二人の男にその腕を回している（349）。K.がビュルストナーに対して下した判決は、「誘惑者」であるというものになる⁴²⁾。31歳の誕生日の前夜、二人の紳士に連行されるK.は途中、広場でビュルストナーのような女性を見かける。K.はその女が自分たちの前を通ってゆく方角（Wegrichtung）に道を決める。それは「彼女が彼にとって意味する警告を忘れないようにするためだった」（308）からである。ここで語られる警告とは何だろうか。K.はキスに先立ち、ソファーに横たわるビュルストナーに「誘惑者」を見る。それは彼女が弁護士事務所に勤めると述べた直後であった。彼女が弁護士の方向（in dieser Richtung）へ進むことは、K.が敵対すると考えている、ほとんど女の尻を追い掛け回す連中（Frauenjäger）から成り立っている裁判所組織に彼女が組み込まれることを意味している。K.が彼女の方向へ行くことは、敗北、すなわち処刑への道であり、自ら死を選ぶことになる。

『審判』においては、ある個人が別な場面では全く別の顔を見せる。ヨーゼフ・K.が行動や意識では有罪/無罪を（発言では無罪を一貫して主張している）、性格においては、厚かましさ/内気さの間を動くように、フロイライン・ビュルストナーも（ヨーゼフ・K.から見たうへでは）誘惑者/卓越者の間を行き来する（彼女の発言は一貫して貞淑な姿を見せる）。『審判』における人物の「典型」を定義することは困難であり、『審判』の「人物造型」は一つに定義できない人間性に迫ったものである。また、『審判』の掟は真実/虚偽を、正義/不正義の間を、書物は法律書/ポルノの間を揺れ動く（それでもヨーゼフ・K.に対しては一貫して有罪を宣告する）。

これまで『審判』は、男性によって描かれたものにすぎないという批判があった。しかし書き手が男性である以上、たとえ女性の立場から書くことができても、それは女性の「視点」ではない。『審判』は三人称でありながら、ヨーゼフ・K.の「視点」か

41) 「ビュルストナーとの関係も訴訟に呼応して揺れ動いているように思われた。」(167) というのがその箇所は『審判』が未完であるせい、詳しく描かれていない。

42) ただし、これは未完の章「その建物（Das Haus）」(346-350)においてである。

らのみ語られる。それは書き手を投影したものにほかならない。このことは、個人を超越した「視点」から人物を俯瞰して眺めることの限界を理解したものである。この限界を補い、「誤った遠近法」で書かれた法律書に対抗するため、カフカの「人物造型」があるといえる。それはあたかもフェミニズム・ジェンダー研究からの批判を予期し、性差を超えた散文を意図したかのようである。最後に付け加えるならば、『審判』の世界の「掟」に携わる者はほぼ男性しかいない⁴³⁾。これは、「男性世界のものであった」と指摘される、現実の法律世界の問題を浮き彫りにしている。これらが『審判』の返答である。すなわち、『審判』を女性蔑視とする〈訴訟〉において判決ははっきりと、無罪である。

43) 裁判所組織において、女性は事務局にいる案内係の娘しか現われない。彼女は男の案内係よりも良心的で親切にもみえる。

Die Charakterisierungen der Frauen und Männer im Roman *Der Process* von Franz Kafka

— Der andere „Process“ —

Tomoki Shoji

Im Roman *Der Process* von Franz Kafka (von August 1914 bis Januar 1915 geschrieben und 1925 veröffentlicht) wird nicht nur viel über die Frauen erwähnt, sondern auch ist der Sexismus zu finden. In dieser Abhandlung geht es um die Frage, was diese Erwähnungen im Roman bedeuten. Zuerst werden die Erwähnungen über Fräulein Bürstner so weit wie möglich gesammelt und interpretiert. Die Veränderung der Charakterisierung von Fräulein Bürstners hängt eng zusammen mit der von Josef K. wie zwei Seiten derselben Medaille. Und das stellt auch gleichzeitig die Veränderung der Gesetzwelt im Roman dar. Zum Schluss wird die Kritik des Feminismus und der Genderforschung überprüft und kommt vor Gericht wie im Roman. Das ist der andere „Process“. Bisher wurden die Frauen- und Männercharakterisierungen nicht miteinander in Beziehung gesetzt, sondern getrennt behandelt. In dieser Abhandlung wird auch darauf aufmerksam gemacht, wie diese Charakterisierungen die Wirkung auf den ganzen Roman ausüben.

Im *Process* wird Frau Grubach als eine traditionelle und auch konservative Frau charakterisiert, im Gegensatz zu Fräulein Bürstner, die einen Beruf hat und eine Freidenkende ist, d.h. sie ist „Neue Frau“. Beide Frauen stehen sich als „Typus“ gegenüber. Die Hauptperson, Josef K., möchte Bürstner vertrauen, sie ist eine Nachbarin in seiner Pension. Aber es gibt ganz unterschiedliche Schätzungen. Einerseits wird sie als „Verführerin“ kritisiert und andererseits bewertet man sie als „eine überlegende Frau“. Ein Grund dafür wäre das Problem der Perspektive im *Process*. Ein charakteristisches Merkmal des Romans ist die Darstellungsweise. Es ist bislang vom Standpunkt der Philologie analysiert worden, *Der Process* wird in der dritten Person geschrieben, darum könnte „der Erzähler“ nicht mit Josef K. identisch sein. Z.B. gibt es eine Stelle: „Er wußte, dass Fräulein

Bürstner ein kleines Schreibmaschinenfräulein war, das ihm nicht lange Widerstand leisten sollte.“ Dieser Satz ist doch eigentlich in der dritten Person geschrieben, aber der wird von Josef K. erzählt. Daher behauptet man, es sei Josef K.s Glaube, dass „Jemand musste Josef K. verleumdet haben, denn ohne dass er etwas Böses getan hätte, wurde er eines Morgens verhaftet.“ Kafka hat 27. 5. 1914 in seinem Tagebuch geschrieben, „Ich finde die K häßlich, sie widern mich fast an und ich schreibe sie doch, sie müssen für mich sehr charakteristisch sein.“ Wenn die Beschreibung wortwörtlich wäre, wäre Josef K. kein positiver, sondern ein negativer Mensch.

Schließlich kann Josef K. die Hilfe von Bürstner nicht bekommen. K.s Urteil über sie lautet „Verführerin“. Am Vorabend seines 31. Geburtstages, es war gegen neun Uhr abends, wird Josef K. von zwei Herren weggeführt. Er sieht unterwegs eine Frau auf dem Platz. Vielleicht ist sie Fräulein Bürstner. K. wählt die Wegrichtung, die das Fräulein vor ihnen genommen hat. „Nur deshalb um die Mahnung, die sie für ihn bedeutete nicht zu vergessen.“ Was bedeutet nun die Mahnung? K. hat „Verführerin“ in Fräulein Bürstner gesehen, als sie auf der Ottomane lag, bevor K. sie küsste. Das war unmittelbar nach ihrer Rede, sie wolle nächsten Monat als Kanzleikraft in ein Advokatenbureau eintreten. Dies bedeutet, dass sie ins Gericht geht, das nur aus „Frauenjägern“ besteht, denen K. widersteht. Wenn er diese Wegrichtung wählt, muss er eine Niederlage erleiden, weil der Weg zur Hinrichtungsstätte führt. So wählt K. selber seinen eigenen Tod.

Im *Process* hat eine Person oft zwei Gesichter: Josef K. schwankt zwischen schuldig und unschuldig, zwischen frech und schüchtern. Fräulein Bürstner schwankt auch zwischen „Verführerin“ und „Überlegender“. Es ist deshalb schwierig, „den Typus“ der Charakterisierungen im *Process* zu definieren. Die Charakterisierungen nähern sich doch dem Wesen der Menschengestalt. Außerdem schwankt das Gesetz im *Process* zwischen der Wahrheit und Lüge, zwischen der Gerechtigkeit und Ungerechtigkeit, die Bücher schwanken zwischen Gesetzbüchern und Pornos. Bisher ist *der Process* kritisiert worden, dass der Roman nur von einem Mann geschrieben wurde. Wenn aber der Schriftsteller ein Mann wäre, könnte er aus dem Frauenstandpunkt nicht schreiben. Daher wird *der Process* nur von der Perspektive Josef K.s erzählt. Das ist nichts anderes als eine Projektion des Schriftstellers. Der Schriftsteller versteht die Grenzen der menschlichen Perspektive, die schwer über eine persönliche Perspektive sehen kann. Die Veränderung der Charakterisierungen und der Grenzübergang des Geschlechtsunterschieds im Roman ermöglichen, die Grenzen der menschlichen Perspektive zu ergänzen und den

Gesetzbüchern mit der „falschen Perspektive“ zu widerstehen. Das ist gerade so, als ob der Roman die Kritiken aus Feminismus und Genderforschungen im Voraus gewusst hätte. Und schließlich treten im Gericht im Roman fast nur Männer auf. Diese Tatsache macht das Problem des Gesetzes deutlich, das von Feminismus und Genderforschungen immer wieder kritisiert wurde.

Die Antwort des *Processes* lautet: Wenn man *den Process* wegen des Sexismus anzeigen würde, würde er sicher freigesprochen.